

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 三島由紀夫 『宴のあと』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

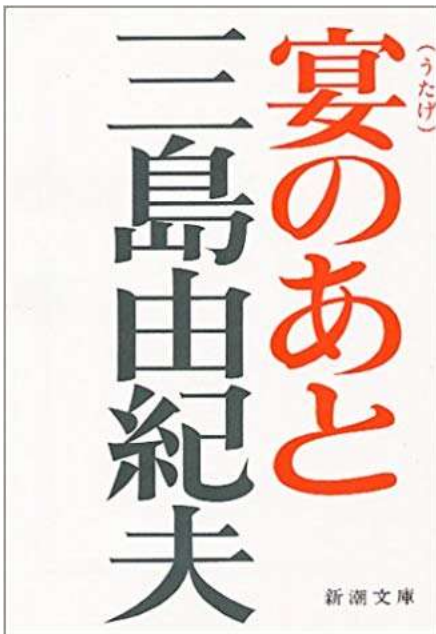
『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 167 回のツイキャス読書会の課題図書は、三島由紀夫 の『宴のあと』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

「芝居のあとの空虚感」

私はこの小説から作り込まれたパズルのような印象を受けたので、パズルを分解するように読み解きます。途中までになりますが、主人公福沢かづに焦点を絞り第1章から第7章まで見ていきます。

まずは第1章。

かづは所有する雪後庵を完璧にコントロールしています。かづは全てが自分の所有物で、きちんと整理されていることに満足しています。

これが小説の最後、第19章では次のように描かれます。

かづの手に戻った雪後庵は、最初と同じように完璧に整えられます。しかしよく見ると、以前は気づかなかった不快な記憶や不気味な喜びが潜んでいるのを、かづは発見します。

雪後庵の変化は、かづの心の変化でもあります。この小説では、彼女が自分の中に潜む不快な記憶や不気味な喜びを受け入れていくことが、政治家としての彼女の覚醒と重ねて語られます。

つづく第2章。

雪後庵で元大臣たちの同期会が開かれます。老人たちは思い出に固執します。

そこに野口雄賢が登場。「過去の話はよみましょう。我々はまだ若い」。

これはかづを解放する言葉です。彼女は50代にしてすでに余生が保証されていることに安心すると同時に、自分の物語はもう終わったと思い込んでいます。

さらに野口はかづに「まるで娘のようだ」とも言う。これもかづを解放します。彼女は娘時代の過去を抑圧しているからです。

野口のシャツに付いているシミが、かづのコントロール欲を刺激します。

客の一人、環が脳溢血で倒れます。完璧にコントロールしていた雪後庵に、死の影というシミがつき物語は動き始めます。

続いて第3章。

倒れた環の対処をテキパキする野口を見たかづは、雪後庵が野口の家のように感じます。雪後庵、つまりかづが、野口に支配されかけています。これはあまりに早い。かづは待ち望んでいたかのようです。

雪後庵から客が帰った後の29ページ、「宴のあと」という言葉が二回も強調されます。

かづにとって雪後庵は宴の舞台であり、手練手管を使って客を喜ばせるのが仕事。雪後庵の宴が終わると、かづは粗末で殺風景な部屋で一人孤独に眠ります。かづは毎日毎日宴をし、毎日宴のあとの空虚感を味わっています。

第4章。

脳溢血の環を運んだ病院で、かづは死の影に怯えます。

かづは鎖に繋がれた実験用の犬を見て「可哀そうな犬！可哀そうな犬！」と取り乱し、鎖に繋がれた犬を救ってやりたいと願います。これは、私は鎖に繋がれている、誰か救ってほしい、という気持ちを犬に投影しているのでしょう。

第5章。

かづは野口にきれいなYシャツや洋服を着せたいと夢想します。これはコントロール欲です。

かづは野口に支配されたい、と、野口を支配したい、の間に揺れます。

第6章。

野口とかづが歌舞伎を見たとき、かづが泣きます。その後のやりとり。

野口「どうしてあんな馬鹿馬鹿しい芝居をみて泣くんだ」

かづ「自然に涙が流れてくるんです」

野口「そこをよく説明してみなさい」

ここは重要です。野口は芝居を馬鹿馬鹿しいと切り捨てます。

後半の選挙活動で、野口が嘘や駆け引きを極端に嫌うことがわかります。彼は嘘をつかず芝居をしないことに優越感をもち、かづを見下してさえいます。

しかし野口は本当に嘘をつかず正直に生きているのでしょうか。

芝居見物のあと、野口が大事なライターを失くしてドタバタします。小説内で野口が最もあわてふためく場面です。

また野口は古い英国製の外套を着ています。

かづが野口の家に行った時、大量の洋書に圧倒されます。「野口もよくその効果を知っている」と描写されます。

洋書と同じように古い外套、古いライターも他人に与える効果を狙って身につけています。野口は芝居をしたり嘘をついたりはしません。しかし、英国風の小道具に身を包み、自分を偽って見せます。後半で明らかになりますが、野口は古い支那流、儒教流の思想の持ち主です。その古い思想の上から英国風の衣装をかぶせているだけです。

中身の思想はそのまま、衣装と小道具で別の人間になります。これはいわばコスプレです。

ここでかづと野口の大きな違いが出ます。

かづは生き残るために芝居を演じ続けてきました。保守派の議員と渡り合えるほどの役者です。

後半の選挙活動は経験したことのない非日常的な状況です。かづは芝居の基本が身につけているので、どんな舞台でも怯むことなく生き生きと喜怒哀楽を爆発させる。むしろ舞台が大きくなるほど観客との一体感を感じて力を発揮します。

一方の野口は決まったセリフをボソボソ喋るだけ。コスプレイヤーはどこに行っても決まったポーズと決めゼリフしか言えません。

小説の最後で語られますが、野口は「理想の自画像」を何よりも大事にします。理想が大事なのではなく、理想の自画像が大事。

選挙で理想のためになりふり構わず戦わないのも、負けた後も理想の実現のために戦い続けるわけでもないのも、理想が大事ではないからです。

彼にとって重要なのは、自分は汚い保守派とは違い、嘘をつかず卑怯なこともせず戦った、という理想の自画像を守ること。勝ち負けなどどうでもいいのです。

最後に第7章。

旅行先での火を使った宗教的な儀式に参加したかづは、死後のことを考え不安になる。その不安を抑えつける場所として野口家の墓を夢想します。

さらに火の儀式によって封印していた過去の記憶が蘇ります。かづのために死んだ男、社会の底に沈んだ男、地位や財産を失った男、と悲惨なことばかり。

かつの中には強烈な破壊衝動があります。彼女は一見支配されているフリをしながら相手の懐に入ってコントロールし、じわじわと相手の尊厳を奪う。これは保守派の黒幕永山元亀のやり口にそっくりです。

火の儀式を見ていると、かつは雪後庵の完璧さがなにもかも偽りだったと感ずます。かつはトランス状態に入っていく、取り憑かれたように興奮して泣き叫びます。かつは燃え盛る火を見つめながら、死の影や過去の罪悪感を感じつつ、芝居を忘れて自らを解放します。ここに選挙活動で自らを解放していくかつの原型が提示されます。

さらにこの後、盆踊りと選挙が重ねて語られることで、日本における選挙というのは、盆踊りのように民衆がひとつとなって祈りを捧げる呪術的な儀式であることが示されます。その儀式で政治家は、民衆を一つにまとめる預言者を演じることが求められます。

現代のマニフェストなどは預言そのものです。日本には自民党はもちろん、山本太郎やN国党など芝居がかった預言者で溢れています。

(おわり)

「宴のあと」感想文

初めて読んだ頃は登場人物の誰にも感情移入できなかったが、今回再読しながらかつという人物に非常に自分を投影していることに気づいた。かつの漲る情熱や憎めない凶太さが昔の自分を想起させたのだ。

大学二年のとき、学生会長に出馬した知り合いの先輩の選対に入ったことがある。彼は学内でしばしば「赤」と呼ばれる政治サークルで活動しているひとだった。公約がどうだったかはまったく記憶にないが、いかにもそれっぽい印象を与える経営学科出身の親大学派の対抗馬に比べると、あまりにも理詰めで「正義」にこだわっていた(人文系じゃない学生からすれば口うるさい厄介ものにしか見えなかったに違いない) 自分はどうにこれは負けるとふんでいたが、なぜか必死で選挙運動に臨んだ。若者の意地だったかもしれないし、先輩に義理を立てていたのかもしれない。案の定、苦杯を喫することとなり、反省会のときに自分は涙を演じ、まだほとんど名前の知らない選対の皆と傷のなめあいっこをした。

こうやって僕なりの小さな宴は終わり、それからもいくつかの活動を転々としながら、出口の見えぬ燃え尽きと空虚の堂々巡りを繰り返した。実は今も自分の鬱憤やもてあましていり情念を晴らそうと奔走している。政治を恋愛に喩える著者の旨は分かりきれなかったが、かつという人物を通して、その一挙一動を逐一なぞりながら応援したり、悔やんだりするというふしぎな体験をさせてもらった。今もある種の昂揚が治まらない。これだけ進む情緒を生硬でえぐい文章で(しかも到底ひろえそうにないメタファーや理屈をちりばめて)書こうと思うのは三島くらいだろうなあと思った。

(おわり)

政(まつり)のあと

この作品は雪後庵の女主人かづと、大臣まで務めた政治家野口との出会いから別れまでを描いた作品だ。三島由紀夫を読むのは初めてだったが、自分が思っていたより精緻に作り込まれていて、職人が作り込んだ精密機械のような美しさを感じた。

月並みな言い方だが、登場人物みなキャラが立っており、だれもが生き生きと描かれていて読んでいて気持ち良かった。

小説の主題はずばり日本式政治と恋愛の関係というものだ。

まず、今も昔も自民党のやり口はほとんど変わっていないのだな、と感じた。

民衆はみな何も考えていないのだから、金やら違法行為やらなんでもアリで投票を促し議席を確保する。

野党はというと、ひねくれものどもが鬱憤ばらしをするためと形だけの民主主義を飾り付けるためだけに存在している有様だ。

その点、かづの取った選挙活動というのはあながち間違いではない。素手でサッカーをやっているような相手に対して、何を遠慮することがあろう？

だがちょっと待ってほしい。それで勝ったとして、何になるというのだろうか？

例え勝っても、国民にはちょっと名前が違うだけの同じものと映るだろう。

私は野口のような高潔な理想主義は心地よく感じる。勝つために手段を選ぶ。自分から、自分なりのやり方で勝負に挑む。見る人は見ているのだ。例え負けたとしても、それが未来に繋がるハズである。

かといって、現在日本で自民党以外の政権は難しいのも事実である。次善の策としては、自民党が暴走しないよう、国民は馬鹿ではない、と思わせるぐらいしか手は思いつかない。

そのために少しずつでもいいので勉強をするべきだし、考えるようにしていかななくては、と思う。

物語の最期では、選挙に敗れ雪後庵を失ったかづが、政敵に雪後庵の再建の金を出させる。野口はかづに失望し、雪後庵と離縁の究極の選択を迫る。

かづの一連の行動は、そりゃあんまりだとは思ったが、こと雪後庵の再建に的を絞れば最も効果的な手段だ。

最後の最後まで権謀術数にまみれているのは徹底していて小説として美しいと思った。

日本の政治は権謀術数のみに重きが置かれており、それは理想の政治とはほど遠い、が、それで回っているんだから仕方ないのだ。という作者の、宴のあとのような切ない心情を感じた。

(おわり)

『政界も財界もみな馬鹿揃い』

(引用はじめ)

八十の隠退実業家は俳句をつくった。一同は笑ったが、こんな冗談が青年の口から洩れるのだったら、誰も笑おうとしなかったろう。かれらの会話はいかにも記憶の確かさ精密さを競うことに、重さが置かれすぎていた。それをじっときいていると、青年たちが女に関する知識で虚栄心を競っている会話と、どこか似ているような感じがする。(P.63)

(引用おわり)

この一文に、日本の政治風土のすべてがある。和辻哲郎を引用すると、モンスーン型の精神に牧場型の様式を身にまとった近代日本政治の必然である。東大寺二月堂の修二会に集った夥しい群衆は、それを象徴している。

瞞着で世間を渡り、野口との関係性で永遠の瞞着に入ることを望むかすには夫が威厳を保つ政治家にうつるが、ダンヒルのライターを落として狼狽し、過去の品物に固着するエリートのダンディズムは理解に苦しむ。一高から東大に、東大から官僚に、システムに呑まれたからっぽテクノクラートとは野口の姿だ。

この小説に登場する政治家からは、アナトール・フランスが描くパーソンの行動様式が感じられない。良い悪いは別に、それが日本の政治風土である。現代政治にはこの時代のような派閥抗争すらなく、三ばんの世襲議員にある行動様式は忖度だけだ。

もはや宴のあとが空虚なのではない。我々の空虚な日常にはスマホがある。それさえあればいくらでも指は動く。指一本動かすのもいやになるような空虚などひと昔前の話だ。遠心分離の脱水機のように人間性を見失っていることに気づかぬ絶望こそ我々の日常であり、テクノロジーによる生活改良と究極の物質主義的日常が生み出すままと政治が我々の必然だ。

三島由紀夫は小説を書くことによって、日本政治の空虚さを暴いた。なぜ暴いたのか？ 三島自身、官僚を辞めて小説を書かずにいられない天才的な馬鹿なのである。彼には生の倦怠というものが許せなかったのではないだろうか。

(おわり)

『宴のあと』 感想文

自ら築き上げた「雪後庵」、その達成感と何不自由ない老後、この幸福感の隙間に、負の風は容赦なく入ってくる。

野口を愛することは止められないし、何れお互いの本質が理解できていなかったことに気づくが、初めはお互いの考え方や行動をかばいあっているようにも見える。

かづは、野口と結婚することで、最後に成し得たかったのは、「まことに身ぎれいな誇り高い一族」に連なる事であったのか。

(引用はじめ)

「かづが今やその人たちの一族に連なり、その人たちの菩提所にいずれ葬られ、ひとつの流れに融け入って、もう二度とそこから離れられないということ、何と安心なことだろう。

何という純粋な瞞着だろう。かづがそこへ葬られるときこそ、安心が完成され、瞞着が完成される。それまでは世間はいかにかづが成功し、金持ちになり、金を撒こうと、本当にだまされはしないのだ。瞞着で世間を渡りはじめ、最後に永遠を瞞着する。これがかづが世間に投げる薔薇の花束である。」(新潮文庫 p.92.93)

(引用おわり)

一番深く案じていたのは、「無縁仏」になる事だったのだ。そう思うとかづの淋しさを悲しく思い、気持ちを察する事が出来た。

しかし、この瞞着の完成は、やはりあり得なかったのだと思った。自分の過去を封印し、別の人間の血筋や功績に乗ることなど出来ないし、自分を生きていない。しかし、皮肉にも選挙によって、自分を見出して行く。

保守派の悪事を見てきたかづが同じ手段で選挙に臨むのは、やはり連なれない証であると感じたが、その能力は見るものを圧倒する。

かづは目線が低いし、理論はないが民の心を掴む、非常にこの世的で政治家に向いていたのではないかと思われた。

かづは民から貴婦人と見られたい願望があるが、人々の眼は、かづの本質を見抜いている、貴婦人ではないと、そこが印象に残る。

「論理と心情と人間的魅力」だけを政治の全てだと考えていた野口とかづ。

その心情を大きく裏切られる。汚いお金と大物政治家が手を回し、落選する。

永山元亀の泥の堆積そのもののような男性を見てきたから、野口の様な人間に最も惹かれたのに、最後はまた元亀の力が救いに感じるかづの気持ちが悲しいこの世の悪を感じる。それで政治が成り立っている。

野口の生き方、人間性、かつの失態にも声ひとつあげずに考え、察する、
最終決断は一步も引かない。魅力的であるが世俗ではなかなかうまくは生きられないが、やはりこう言う人を多くの女性が好きであると思う。

そう言う人間を演じていた節も文章から感じられる。それを見抜いているかつもすごいと思った。

最後の山崎がかつに宛てた手紙が、この小説の全てを語っている気がした。

「すべては所を得、すべての鳥は罫(ねぐら)に還ったのです。」

かつが雪後庵でゆっくり眠れることを祈りたい。全ての出来事は無駄にならない。

着物の細かい描写、お料理の数々、
更に詳細なかつの気持ち、心の動き、
自衛隊のあの高い場所で声をあげていた三島由紀夫の男性の部分と女性的な部分の二面性を感じた。

人は苦勞を選び遠回りして自分を見つける、人は死ぬ間際まで何ひとつわかっていないのかもしれない。

(おわり)

『宴のあと』 感想文

有名人が集まる、料亭の女将のかづ。すべてを手に入れたような華やかな生活。

どちらかと言うと、憧れられる生活なのかもしれないと思いました。

私は憧れないですが……。

全てを手に入れたかづでも憧れるおだやかな結婚生活。でもそれは目には見えない努力と辛抱の上に成り立っている事に気付けなかったようにも思いました。

かづが料亭雪後庵を切り盛りしてくのも大変な努力があつての事で、想像するだけでも、平凡な私にはとても無理だなと思います。

雪後庵はかづにとってただの料亭というのではなくかづの全てなのかもしれないと思いました。

かづを芸能人に例えると、私の頭に浮かんだのは椎名林檎でした。

そんじょそこらの、その他大勢の女じゃないのよ私は！ と椎名林檎さんは思っているかどうかは分からないけれど、私にはそういう風に感じます。

もちろんこれは私の勝手な思い込みで、全然違うかもしれませんが……。

芸能界と料亭では全く違うかもしれませんが、その世界からは抜け出せないし、抜け出たくない、そこでずっと生きていたいと思うものなのかもしれないなと思いました。

このお話には政治的な事など、きっと複雑な事もあると思いますが、難しくよく分かりませんでした。何かしらルールがあつて、そのルールからはみ出してしまったかづは窮地に陥る事になってしまったように思いました。

(おわり)

『熱情の中にはらむ矛盾』

野口はある論理を持っていた。

(引用はじめ)

「野口は人間のやることとして、政治にも愛情にも径庭のあろう筈はないという考えだった。人間のやることはみんな同じ原理に基づいており、政治も愛情も道徳も、それぞれの星座のように、決められた法則に従って動くべき筈のものだった」(P.244)

(引用おわり)

かづの「しじゅう動いている者に対する愛情、活気に対する熱情、全身を動かして飛び回ることへの生まれながらの熱情」は、間違いなく野口にとって魅力的に映り、熱情をそそられるものだった。自分と相反するからこそかづに惹かれる野口。野口はなぜかづと結婚したのか？結婚により自分の生活の中に自分とは相反する分子を取り込み、何を望んだのか？

二人は東京都知事選で、お互いの政治の手法を変えることなく自分の戦い方を貫き、膨大なエネルギーをつぎ込んだ。しかし、敗北の後に押し寄せてきた寂寞の波に、あらためて自分自身に立ち返るしかなかった。

野口は、論理で生きられる。

かづは熱情で生きられる。

結局、政治は野口の論理を貫けるものではなかったし、かづはもっと複雑に変容した。平穩は隠居生活を望む野口的手中に収まらず、一緒に選挙を戦って初めて、かづの生き様そのものが保守党の萌芽をはらんでおり、熱情の対象から自分の最も憎むべき存在そのものに転化したことに野口はあらためて気付かされたのだ。

「これはずいぶん遅い発見で、この廉直の人の楽天的な一面をよく現わしていた」(p244)ように、野口は楽天的で甘いところがあったのだろう。裏を返せば、野口に欠けているのが政治そのものではなからうか？かづの圧倒的熱量を前にそんな風に映ってしまう。

自分より力のある女性を男性はどう繋ぎ留めていけるのだろうか。男性がその女性を諦めない限り、その構図の中では女性が自分を諦めることでしか関係性を維持できないように私には思える。それが無理なら女性は男性の元を離れ飛び立っていくのだろうか。一方で、飛び立つことでしか自分を保てない女性側もまたかづのような孤独に陥る。行きつく先の「無縁仏」の恐怖を感じながらも、そうすることでしか生きられない自分と決別できない。

分かっちゃいるけどどうすることもできないのだ。ではなぜ野口はなぜかづと結婚したのか？それは、「更年期の迷いの中、再び自分を取り戻すため」の必然的なプロセスだったのではないか。かづにも同様に。

すべては終わったあと。宴のあとの寂寞が教えてくれたことだった。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 宴のまえとあと 』

市議会選挙が近づくと、インターフォンが鳴る。

モニターには町内会長の顔が映り、その後ろには候補者が張りついた笑顔で控えている。

「〇〇さんです。また頼みますなあ。」となぜか町内会長の方が腰が低く、居丈高な候補者はぬっと手を差し出すだけだ。

仕方なく…… その手を握り返すが、こんなことが得票につながるのかといつも疑問だ。

ネットで、候補者の公約の遂行率を示してくれた方がよっぽどわかりやすい。

だが、田中角栄—小沢一郎ラインのドブ板選挙は、一定の効果を未だにもたらすらしい。

福沢かつの身を挺した選挙活動のところを読んで「歩いた家の数しか票は出ない。手を握った数しか票は出ない」(Wikipedia より)という人心につけ込む手法は、この小説から60年経とうと健在だ。

夫の都知事選に敗れて、気晴らしのために観る映画さえ決められないかつに山崎は言う。

「むりに行くことはないです。大体今の状態で、むりに気晴らしを求めたって無駄ですよ。今はまだしも忙しさに紛れているからいいが、そのうちにどうしようもない空虚が来ます。指一本動かすのもいやになる空虚が」(新潮文庫 P.20)

あの精力的だったかつにも、いよいよ「空虚」が訪れるのかと読みながら寂寞とした気持ちになった。

……が、雪後庵を抵当に入れてでもドブ板選挙をやり切ったかつは、そうは問屋が卸さない。

一度は手放した雪後庵の再建に立ち上がる。

ああ、この人は永遠に宴の「まえ」の人なのだと実感した。

作家の森瑤子氏の小説に登場する有名なフレーズがある。

「傷心と空虚のどちらかを選ばなくてはいけないとしたらどちらを選ぶ？」と男が女に尋ね、女は傷心を選ぶと答える。

「空虚はなにもないこと。そんなのぞっとしない？ 自分の中がからっぽになってしまうなら、どんなに辛くても傷心を選ぶ」と。

ところが、男は「空虚」と答える。

「たえきれないほどの傷心に比べたら、何も無いほうがまだ」と。

私自身も、以前は「傷心」を選んでいて。

傷つくことが生きている証明のように、ひたすら壁に正面からぶつかっていた。

しかし、今なら「傷心」を選びきれないだろう。

それは、年齢からくる経験からなのか、数限りない傷心を経て辿り着いた「空虚」に惹かれてしまう。

たぶん、都知事選の後のかつとの散歩のときに、隠居の方へ舵をきった野口は確実に「空虚」を選ぶ。

彼は、かつとは違う宴の「あと」の人なのだ。

野口も、大臣在任時のようは現役の頃は違っただろう。

(引用始め)

かづがもう決してどんな空虚にも耐えられないということである。空虚に比べたら、充実した悲惨な境涯のほうがいい。真空に比べたら、身を引き裂く北風のほうがずっといい。

(P.211)

(引用終わり)

上記のように、かづは山崎から聞いた「空虚」に怯え、焦燥感にかられる。

「不可能ということが輝きの素」(P.211)というように、絶望的な雪後庵の再建に立ち上がる。

そのためには、夫の政敵でもあり、ひどい目にもあわされた永山元亀の元にも奉加帳を持って馳せ参じることができる。

そんな自分に正直すぎるかづに、永山も思いが込み上げて涙する。

ひょっとすると、小説の冒頭のかづが満足そうに雪後庵の庭を散歩するシーンは、彼女が「空虚」に落ちかけていたときかもしれない。

老獯な政治家たちをうまくさばき、雪後庵の経営も順調な状態は彼女にとっては満足というより「空虚」だった。

だからこそ、枯れた老政治家と結婚して、すべてを失うドブ板選挙までしてしまう。

しかし、野口が当選していたら、また「空虚」に落ちて、結局は離縁していたに違いない。

彼女には、永遠に宴の「あと」はやってこない…… どうか選ばない。

宴の「まえ」の人生も「あと」の人生も、生き方の違いだけで優劣はないが、どちらかだけだと疲れてしまいそうだ。

でも、アグレッシブに「まえ」の人生だけを選べるかづが少し羨ましくもあるけれど。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/>
ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

「政治と情事は瓜二つ」

田中真紀子さんは、独身の小泉純一郎が首相になった時、ファーストレディーのように振舞っていた。彼女が、甲斐甲斐しく純ちゃんのネクタイを直しているシーンが TV に何度も移った。総裁選の功労者として外務大臣に抜擢された彼女の人気は、小泉政権のスタート時の起爆剤であった。その後、スタンドプレーから、揉め事を起こしまくり、田中真紀子さんは、更迭され、小泉総理と袂を分かち、彼女の人気は、小泉政権発足に利用され、その後、彼女は政権の矢面となって、世論の攻撃にさらされた。

愛人のいないルイ 16 世のバッシングの矢面に立たされたのが、マリー・アントワネットだった。王に寵姫があれば、彼女も、自分の立場を守って、オーストリアに帰れたかもしれないが、そこは、婚姻同盟がカトリックの宗教的足枷に縛られていたせいもあって、離婚できない。彼女へのバッシングは、革命の原動力になった。

政治学者丸山眞男が『人間と政治(岩波文庫「政治の世界」所収)』の冒頭で『政治の本質的な契機は人間の人間に対する統制を組織化することである』と述べている。女性が矢面に立たされるというのは、人間に対するという統制の組織化の過程で避けられ得ない現象だ。

自民党には安倍ガールズともいうべき女性議員達がいる。杉田水脈議員、三原じゅん子議員、そのほかにもいろいろいるが、この議員たちが、政治家としての資質を問われるような発言を繰り返して、よくネットで炎上している。その傍ら、閣議決定で私人として扱われることになった安倍昭恵総理夫人は、なんだかんだで、矢面に立たなくてもすむようになっている。森友学園への政治的関与もウヤムヤになっていった。矢面がたくさんあるというのはこういうことだ。

皇后雅子さまも皇太子妃だった頃、よく週刊誌で叩かれていたが、あれも、今思えば、上皇后美智子様さまが、批判にさらされないための矢面になっていたからだろう。雅子さまは、以前ほど週刊誌で叩かれなくなった。

『宴のあと』の福沢かづは、政治に深く関わったために、裸で世間の矢面に立ってしまった。そのため、都知事選の終盤に、保守党の多額な資金が投下され、彼女の過去が怪文書で暴かれ、ネガティブキャンペーンの餌食になる。選挙において夫婦は、役割分担しなければならぬ。高度に統制を組織化したものだけが、権力を奪い、かつ奪い取った権力を維持できるのである。福沢かづの野口への情熱あふれる献身に、小泉政権初期の田中真紀子さんの姿がダブった。

福沢かづが奉加帳を持って歩き回るように、安倍昭恵総理夫人の奉加帳も、総理である夫の名前から始まり、たくさんの方が名前を連ねられているに違いない。この奉加帳が 7 年にわたって膨れ上がっているのが、今の日本の政治状況だ。そして、奉加帳を守るために矢面に立つ女性議員も、御用女性評論家もたくさんいる。高度な組織化である。

このように、保守党＝自民党の政治というのは、『政治と情事は瓜二つ』(第九章)の原理に従って高度に統制され組織化されている。かつて今太閤と呼ばれ、奉加帳の筆頭に署名するような権勢家だった田中角栄の娘さえも、その奉加帳を守れなかった。以上の仕組みを理解して、組織化して、政権を狙わないと、野党はいつまでたっても政権を打ち立てることはできないような気がする。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343